

令和7年度茨城県教育研修センター第2回外部評価委員会記録

日時	令和7年10月29日（水曜日） 午前10時から午前11時45分まで
場所	茨城県教育研修センター 図書情報室
出席者	【外部評価委員】 勝二 博亮 委員 植田 みどり委員 荒瀬 克己 委員（欠席） 沼田 安広 委員 福田 勝之 委員 木野内喜久恵委員 谷津 勉 委員 中村 千秋 委員 【茨城県教育研修センター】 所長 宮崎 薫 次長 佐藤 義一 次長兼教職教育課長 坂上 有紀 企画管理課長 福田 純子 教科教育課長 小出 岳夫 情報教育課長 小林 正士 教育相談課長 坂本 要 特別支援教育課長 阿部 富和 企画管理課指導主事 桧山 龍樹 企画管理課指導主事 畠山 崇
次第	1 開会 2 所長あいさつ 3 議事 (1) 令和8年度に向けた事業計画（案） (2) その他 4 研修講座参観 (1) いじめ対応研修講座 A班 (2) 新規採用教員〔初任者〕研修講座（小学校）Ⅳ期 第8日 5 閉会

1 開会

2 所長あいさつ

3 議事

(1) 令和8年度に向けた事業計画（案）

・事務局から資料1、2、3について説明後、次のような質疑応答があった。

（○は委員、●は事務局を表す）

- 問題点・課題を出しているが、これは何をベースに、何を根拠にしているのか。
- 研修のアンケート結果等から、さらに必要な点、あるいは改善すべき点を検討している。また、本庁各課との意見交換会を設け、強化すべき点や新たに加える点などについて意見等を求め、整理をかけている。さらに、運営協議会において、現場の校長、教頭からも意見を聴取するとともに、国の動向や様々なニーズに応じて、事業見直しの準備を進めている。
- 教科教育課のいわゆる探究でICTをという部分と、一方で情報教育課は生成AIを使った授業で探究ということで、重複感がある。何か違いを持たせているのであれば伺いたい。
- 情報教育課では、ICTを活用した授業づくり、授業改善についての研修の取り扱いということで、授業づくりに実際に切り込んでいくために必要な情報活用能力をベースに、教材教具の価値とその使い方についての気付きを涵養するような講座を作っている。
教科教育課では、教科によるICTの使い方の違いに着目し、児童生徒にどのように探究的に考えさせていったらよいのかということまで深く研修するために、特に演習を大事にした形で進めている。
探究的な学びのために、もっと踏み込んで活用していこうという契機としたい。
- 昨年度から参加者を主語にしているが、育成指標について課ごとではなく、センターとして育成指標との関係をどのようにリンクさせて、研修の体系化を図っていく方針なのか。
- キャリアジャーニーは、現在、検討を重ねている状況である。今後、育成指標の見直しに伴い、委員の皆様からも御助言をいただき、センターとして研修の体系化を進めて行きたい。
参加者が主語になるということを考えると、今、自分がどの位置にいて、何を学ぶ必要があるのかというところの意識付けは、本当に大事な部分である。現在、育成指標の見直しを行っている教育改革課と、育成指標と研修との関連や研修計画、教員評価や対話による受講奨励等が一連に流れていくような形を県として作っていくために協議を進めている。
- プラントとのリンクについて、県教育委員会と協議、連携しながらセンターが役割を果たし、育成指標と研修、研修履歴の管理等を循環する形にするため、総合的にどのように考えているのか。
- 高校教育課やプラントを運営する教育改革課から、紐づけが難しいという回答があった。対応策としては、プラントに受講後の感想や自分の学びを書き込む欄があるので、リフレクションアンケートの内容を参加者に返し、その振り返りをプラントに転記して活用できるように説明資料をまとめているところである。
管理職は、プラントを見ることによって、教職員の学びや身に付いた力などを把握して教員評価や受講奨励に活用できるので、県教育委員会と連携を図りながら循環する流れを進めていく。

- 研修全体の質管理について、アンケートの内容が研修の検証に使われ、問題・課題が次年度の講座の改善につながるとよいと思うが、センターの中での流れはどのようなになっているのか。
- アンケート内容の研修講座への反映については、各担当者が受講者の声、受講者の様子、成果物等を分析し、成果と課題を各研修講座でまとめている。その課題を、各担当者、各課、そして事業ヒアリング等で検討を重ね、次年度の研修講座の構築に反映させている。

- 参加者を主語にしたというところで、先生方の研修は、生徒たちと同じように正解ではなくて納得する回答を自分で編み出していく、見出していくというようになれば、すごくよいのではないかと感じた。そうすると何をよりどころにするのが大事なので、自分が主体として積極的にいろいろな人に関わることは重要な姿だと思う。そこに必要なものは、家庭教育や社会的、哲学的なものに戻って、また、答えを編み出していく、見出していくということが必要なのではないかなと感じた。

(意見のため回答はなし)

- プラントに記載できる研修を一元化した情報があるとよい。学校、個人、働き方改革、効率化、研修の質等のベストミックスの研修が、参加者が主語となる研修だと思う。学校やクラス的环境による違いに対応し、先生たちが本当に課題と思ったものを引き出すことが重要だと思う。

分散会について工夫されているが、さらに、参加者が同じ課題をもって主体的に取り組めるようなグループ編成による協議等を通して、自分たちが取りに行った研修、後に残る研修になると考えられる。また、研修の根拠となる理論や、目的等を明確にすることが大切である。

育成指標との関連については、若手の社会性の涵養をはじめ、ベテラン後期の専門性を生かした目標設定を自覚した研修等の充実が求められる。

I C T、A I、D X等については、効果的な活用法やスキル向上を図るために、苦手意識をもつ教職員の悩みを解決するために丁寧に対応してほしい。A I等の研修は非常に人気があると思われるので、できれば、研修の成果を共有できるような工夫があるとありがたい。

(意見のため回答はなし)

- 特別支援学校の新規採用者について、今年から特別支援の免許がなくても採用されている状態である。3年以内に免許を取得することになっているが、3年勤務して退職してしまうことがないように、研修センターの研修を受講したら、大学と連携して免許取得の単位として認定されるような仕組みが望まれる。

また、新規採用の教職員が多数配置されているので、育成指標との関連で、社会人として、教員としての人権感覚や社会人としての常識などについて、研修センターの研修に限らず、採用前から採用後も機会を捉えて、繰り返し研修の機会を設ける必要があると思う。

(意見のため回答はなし)

- 問題や課題を洗い出し、現場が求める研修内容に変わってきていると感じる。

ベテラン後期の研修について、大変意義があるものであると感じる。その年代の教職員は、自分自身の課題が見えているので、希望研修への参加や特別支援の免許取得等に積極的に取り組んでいる。さらに、情報教育やI C T活用、教育法規についての学び直し、探究的な学習、令和の日本の教育やいじめ対応の変化等について研修することを願っている。実施時期は、学校でベテランの力が必要な時期を避けることを希望する。

ベテラン事務職員は、共同実施の中核となるリーダーとして若手育成をはじめとして献身的に取り組んでいる。また、学校事務以外に担っている役割が膨大で心身ともに疲れているので、研修内容や実施方法等について検討してほしい。

(意見のため回答はなし)

- 次年度の事業計画について、現場の課題やニーズに沿った講座を構築している印象をもった。

A I 活用の講座について、私も興味があり、多くの先生方が聞きたいと思うので、オンライン併用のハイブリッド型などの工夫が望まれる。

残念なことに、教職員の不祥事が多くなっているのを、総合的な対策をとる中で、研修は大事だと思うので、コンプライアンス研修の強化や改善などにも取り組んでもらえればと思う。

(意見のため回答はなし)

- 各委員からの感想、意見、質問等を総括すると、ニーズの多様性や世代の多様性にどのように対応するのか、いかに研修を管理していくのか、また、コンプライアンスの件も含め、研修を自分ごととして捉えるかということに集約することができると思う。これらのことについて、センターはどのように考えているのか。

- ニーズの多様性への対応については、様々なコース別や課題別で、できるだけグループを細分化しながら、自分の課題を解決する研修になるように努める。

世代の多様性への対応については、教師塾や採用前研修の見直しをはじめ、若手に限らず研修内容を検討する。

コンプライアンスについては、研修の重点の中に法的知識を有したスクールリーダーの育成を掲げており、法的根拠等をしっかり学び、理解することがコンプライアンスの遵守にもつながると考えている。法規研修等を通してコンプライアンス意識を高め、教職員の指導・助言を行うことができるような研修内容を意識しながら進めていく。

(2) その他

- ・事務局から今後のスケジュールについて説明

4 研修講座参観

- (1) いじめ対応研修講座 A班
- (2) 新規採用教員〔初任者〕研修講座(小学校) IV期 第8日

参観後、質疑応答はなし。

5 閉会